明日を拓く 輝く「ふじの人」づくり

～令和８年度全国学力・学習状況調査「家庭用リーフレット」～

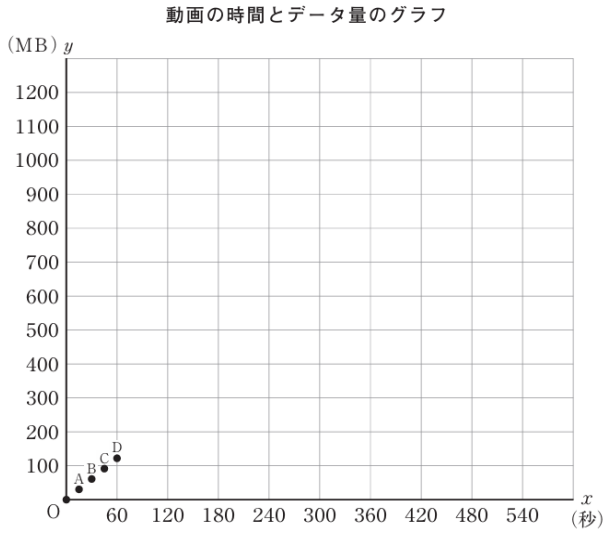
富士市教育委員会

４月に全国学力・学習状況調査が行われました。下の問題例のように、学校で学んだことを日常の経験と結びつけて考える力や、自分の考えを相手や状況に応じて伝える力が多く問われました。
本リーフレットに、富士市の子どもたちのよいところや今後の課題などをまとめました。

令和8年度の問題例（中学校数学の調査問題より）

【動画の時間とデータ量との関係は？】
光希さんのクラスでは、クラス紹介の動画を撮影することになりました。撮影する動画のデータ量は1000MB までにすることになっています。そこで、動画の時間によってデータ量がどのように変わるかを調べるために、同じ撮り方で時間だけを変えて動画を撮影し、動画の時間とそのデータ量を記録しました。　**(1)は省略**

(2)光希さんは、1000MB のデータ量で撮影できる動画の時間を調べるために、調べた結果を下のグラフに表しました。動画の時間とデータ量の**グラフ**において、原点Oから点Dまでの点が一直線上にあるとし、動画の時間を長くしても、動画の時間とデータ量の値の組を座標とする点が同じ直線上にあると考えます。
このとき、データ量が 1000MB になるときの動画の時間はおよそ何秒になるかを求める方法を、x座標やy座標、xの値やyの値など、xやyを使って説明しなさい。ただし、実際に時間がおよそ何秒になるかを求める必要はありません。



＜正答例＞
原点Oから点Dをもとに、直線のグラフをかき、ｙ座標が１０００のときのｘ座標を読む。

学校の授業では、グラフや表から必要な情報を正しく読み取り、比例の関係を式に表したり、式と表を関連付けたりしながら、問題を解決する学習に取り組んでいます。正答を求めるだけでなく、どのように考えたのかを、式や図、数学的な言葉を用いて説明する活動も重視しています。

調査問題はこちらから
（国立教育政策研究所 HP）
https://www.nier.go.jp/26chousa/26chousa.html

本調査の結果をふまえ、小中学校では、資料や状況から必要な情報を読み取り、友達と考えを伝え合うことを通して、自分の考えを整理していく場面を増やしていきます。
ご家庭でも、ニュースや買い物の場面などで、「あなたはどう思うの？」「なぜそう考えたの？」とお子様に問いかけ、考えた理由を言葉にする機会を大切にしてください。

教科に関する調査結果(平均正答率)

※本調査により判定できるのは学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一部分です。
※中学校英語は「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の３技能の結果を、平均 IRT スコアで示しています。

小学校6年生　平均正答率(%)

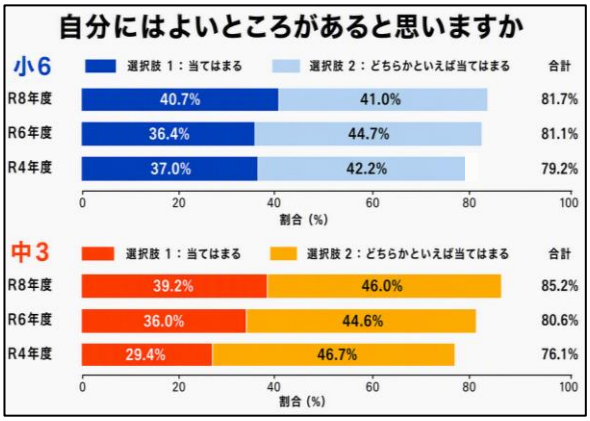
	富士市	静岡県	全国
国語	59	60	60.9
算数	55	56	56.4

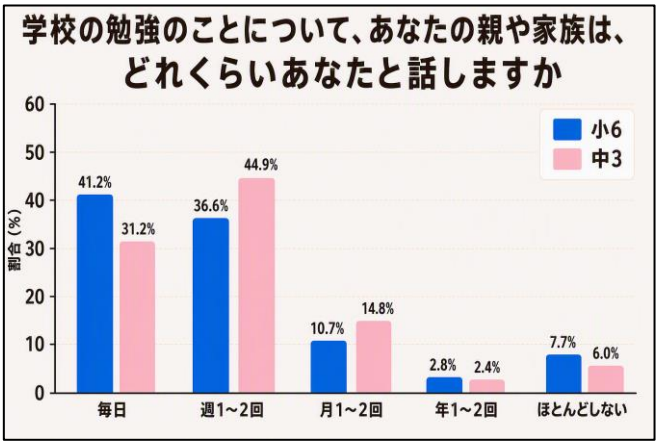
中学校3年生　平均正答率(%)

	富士市	静岡県	全国
国語	62	65	63.9
数学	54	58	57
英語	505	513	499

児童・生徒質問紙調査から見られる傾向

「自分にはよいところがあると思いますか」という質問に対して、「当てはまる」と回答した子どもの割合は、年々増加しています。富士市の子どもたちは、自分のよさを認め、自分に自信をもつことができています。特に、中学３年生では、「当てはまる」と回答した割合がR4年度の29.4%からR8年度の39.2%へと大きく増加しており、成長の過程で自己肯定感を高めている子どもが増えています。これは、ご家庭・学校・地域全体で育まれてきている成果です。





「学校の勉強のことについて、親や家族と話す」という質問の回答結果を見ると富士市の児童生徒は、「毎日話す」「週１～２回話す」と回答した割合が、全国に比べて高い結果でした。

学校の勉強について家族と話すことは、子どもが学習内容を振り返り、自分の理解を確かめたり、授業時間以外にも学習に取り組んだりすることにつながります。日頃からお子さまの学習に関心をもち、話を聞いたり、励ましたりする機会をこれからも続けてください。

右のイラストは、学校の学びと実生活が結びついた瞬間をイメージしたものです。

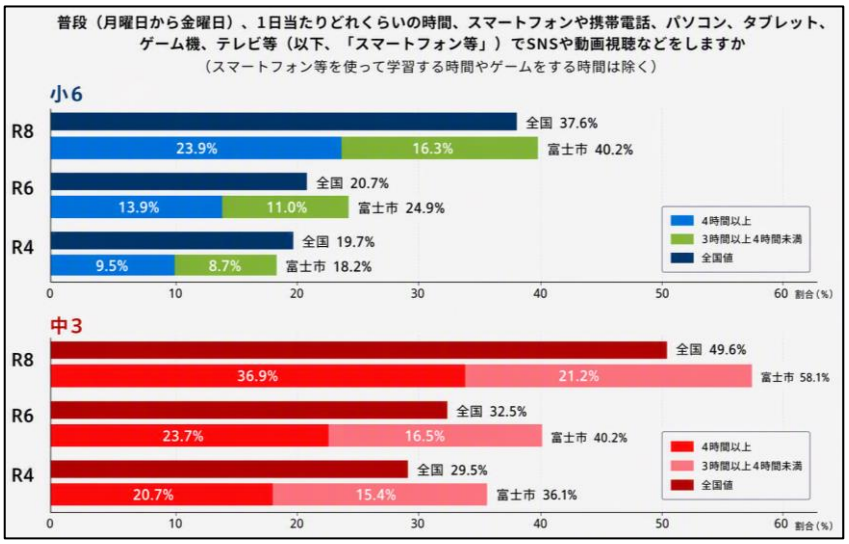
お子さまと一緒に、さまざまな体験を共有したり、会話を豊かにしたりすることは、お子さまのすこやかな成長や家族の絆を深めることにつながります。それだけではなく、家庭での温かな時間が、学ぶ意欲を高めたり、学ぶことのおもしろさに気づくきっかけにもなったりします。ぜひ大切にしていただきたいと思います。

家庭で過ごす時間が、子どもたちの「生きる力」を育む土台に

スマートフォンやゲーム機、テレビなどを１日３時間以上利用する児童生徒の割合は、年々増加しています。R8年度は、小学６年生で40.2%、中学３年生で58.1%となっており、全国と比べて高い傾向が見られ、心配です。

また、スマートフォン等の利用時間と各教科の正答率との関係をみると、利用時間が１日２時間を超えると、正答率が低下する傾向があります。

インターネットやSNSなど、多様なメディアを活用することは便利です。しかし、読書や家庭での会話、体験活動を通して育まれる力があります。ぜひご家庭で、スマートフォン等の利用時間や使い方について話し合い、子どもたちのよりよい生活習慣づくりにつなげていきましょう。



全国学力・学習状況調査（中学校英語）のCBT化について

CBT とは

CBT（Computer Based Testing）とは、コンピュータを使って行う調査のことです。生徒は、学校で使用している１人１台端末を使い、画面に示された問題を読んだり、キーボードなどで解答したりします。

従来の紙では十分に測れない能力を測る問題を CBT で行うことで、各教科の資質・能力の明確化を図っています。

CBT にすることで期待されること

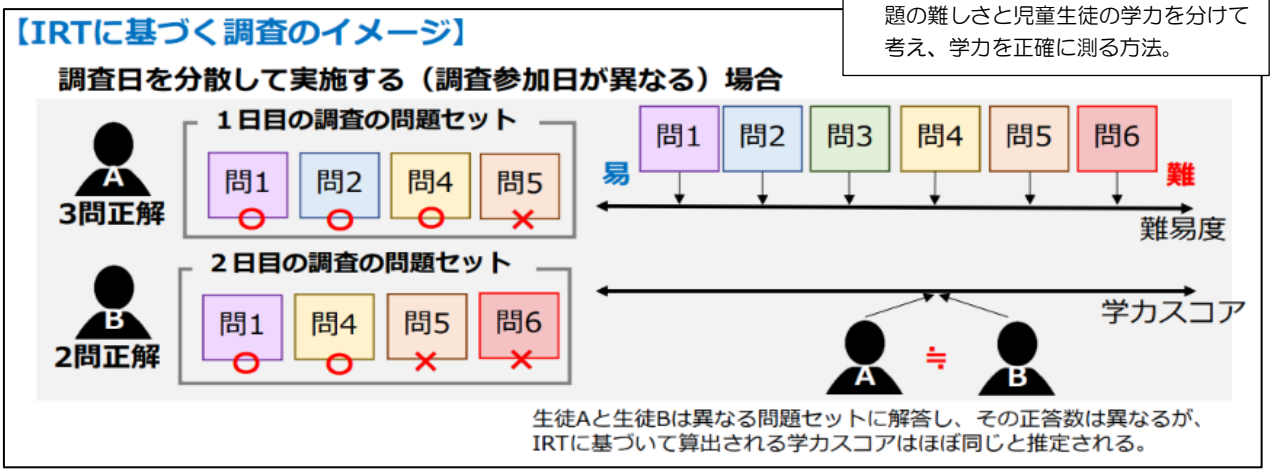
CBT には、以下のような利点があります。

- 動画や音声などを活用し、学力を多面的に測ることができる。
- 児童生徒の状況に応じて、文字の拡大やルビ振り、時間延長などの対応がしやすくなる。
- 解答結果をより速く、細かく分析できる。
- 一人一人の学習状況に応じた指導改善に役立てられる。

問題や結果について

CBT では、児童生徒によって異なる問題に取り組む場合があります。そのため、「何問正解したか」だけではなく、問題の難しさなどを考慮して、IRT（Item Response Theory）スコアという方法で学力を分析します。

※ IRT（Item Response Theory）： 問題の難しさと児童生徒の学力を分けて考え、学力を正確に測る方法。

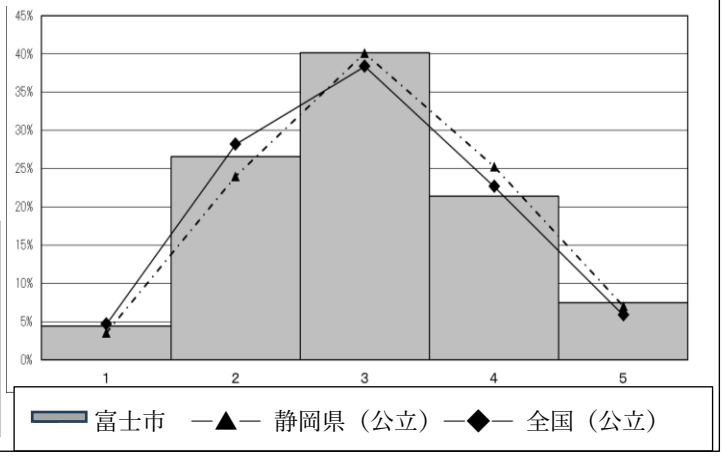


＜中学校　英語（３技能）　IRT スコア集計値＞

	平均 IRT スコア
富士市	505
静岡県（公立）	513
全国（公立）	499

IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500 を基準にした得点で表すものを「IRT スコア」、IRT スコアを１～５の５段階に区切ったものを「IRT バンド」として表されています。

＜IRT バンド分布グラフ（横軸：IRT バンド　縦軸：割合）＞



公開問題例

全国学力学習状況調査　CBT サンプル問題　令和８年度中学校英語「話すこと」問題

【問題文】あなたは、英語の授業で、友達と「思い出を残す方法」について話し合っています。友達の発表を聞き、その内容を基にして「あなたの考え」と、「なぜそう考えるのか」を英語で伝えましょう。

今後の予定

●令和８年度

中学校の英語で CBT を実施

小学校の児童質問調査も CBT で実施

●令和９年度

小学校（国語・算数）・中学校（国語・数学）の教科調査と児童生徒質問紙を、原則として CBT で実施

ご家庭へのお願い

CBT の実施に向けて、特別な学習を行う必要はありません。日ごろから、次の点についてご家庭でもご確認ください。

キーボード入力など端末の基本的な操作に慣れておく。

動画や音声などのデジタル教材を活用し、学び方の選択肢を広げる。

端末を使うときには、こまめに休憩をとる。

なお、市内の小中学校では、ICT 支援員によるコンピュータなどの ICT 機器の活用に関して十分なサポート体制を取っております。

CBT サンプル問題はこちらから（国立教育政策研究所ＨＰ）
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/26sample/26meng_mondai.pdf